

お茶が教えてくれたこと

仁和密教学院一年（京都府）

井上 弘基

不意に涙がすつと頬を伝う。ああ、人の話をこんなにも純粹に素直に聞くことができたのは何年ぶりだろうか。その時、先生は幼稚園の子どもたちにお茶のお作法を教えた時の話をしていた。

「あ、音を立てたらいけないのに」

先生がお茶の最後の一口を吸った時、一人の園児が先生を指さして叫んだ。周りの妙な静けさにその園児はしまったという表情をしていたらしい。先生は一瞬きよとんとして、それからふつと優しく微笑むと、その子に向かって

「あー、お家でお母さんが教えてくださったのね。お食事の時は静かにいただくのよって」

と仰った。「うん」とその子。先生は続けて「いいお母さんねえ。そうなの。日本人はね、お食事の時、静かに余り音を立てずにいただくの。でもね、お茶の音は『最後の一すすり迄おいしく全部いただきましたよ』って点でてくださいっ

た方に感謝の気持ちを含めてお知らせする静かな音でもあの」

と、まだお茶碗の底に残る泡を見せられた。その子の不安げな顔はぱつと明るくなり

「うん、わかった。帰ったらお母さんに言おう」

その安心した顔を先生は今も忘れられないとの事。今でもお茶をいただく度、最後の一すすりにその子の顔を思い出すと仰った。その場にいた他の園児や園長先生含め和やかな雰囲気にも包まれた事は言う迄もない。

この話を聞いた時、私は茶道の片鱗に少しだけ触れたような気がした。その場でまずその園児の家族を褒めたのは正に相手を思いやる心そのものではないだろうか。

利休居士は四規七則の中で「茶は服のよきように点て」「相容に心せよ」と述べている。これは単にお茶席の心得をまとめたものではなく、人の心の在り様を表したもののようを感じる。相手の大事にしているものを自分も一緒に大事にし、その人に寄り沿う。その気持ちの表れがお茶であり作法なのだと思った。

話を聞きながら、ふと自分が保育園児だった頃を思い出していた。私も父に食事中はなるべく音は立てるなど注意された経験がある。当時は分からなかったが、父は私を思っでそう言ってくれていたのだと今更ながら気付くことができた。私にはこの先生の話が私の中にまだ残る素直で純粹

な部分にそつと手を差し伸べ、温かく寄り沿ってくださったように感じた。

気が付けば私は涙を流していた。自分でも理由は分からなかったが、胸には温かなものが満ち溢れていた。先生も、ましてやその園児も何か特別なことをしたわけではない。それでも私にはただありのままに相手を気遣ったその心がとても美しく見えた。私はこの時、初めてお茶を通して人の思いやりに触れることができたと実感したのだ。同時に私もこうありたい、もっとお茶のことをしりたいと思うようになった。

この出来事は私の中の純粹だった頃の気持ち思い起こさせてくれた。これまで茶道と聞くと堅苦しく厳しいイメージがあつたが、何も難しく考える必要はない、と今なら思える。その場にいる人を思いやり、一緒にお茶を楽しむ。点前作法はそのためのものであり茶道の本質とはそんな当たり前のことを丁寧にきちんとすることだと思う。今、私は茶道という道を歩み始めたばかりではあるが、これから少しずつ真心や振る舞いの美しさを学び、お茶を通じて人と人との心の触れ合いを大切にしたい。いつかそれを意識せずとも自然とこなすようになった時、私も先生のように優しく微笑みかけられる人になれるかもしれない、と少しわくわくしている。たった一年の密教学院における茶道の授業であるが、得難い人としての道、私のこれから歩む

道を茶道を始めたばかりの今、教えられた思いである。

私は九月から厳しい加行に入る。自分を鍛える事も学ぶ事も全ては己との戦いだ。先生は「まずは自分を甘やかさない、自分に負けない。若い今だからこそできる」と仰る。先生の言葉はずっしりと重く私の背中を押してくださる。この一年間、与えられる以上のものを両手を拡げて受け取っていきたいと思っている。